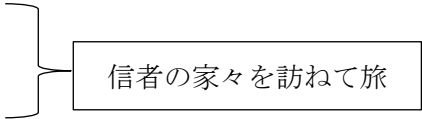


イエスのことば 第 65 回 大宴会のたとえ話

すると主人はしもべに言った。『街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいになさい。言っておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。』
(ルカ 14 : 23～24)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら学ぶ。
 - (1) 起：紀元 26 年秋の受洗から翌年春メシア宣言を経て宣教開始まで（第 1～9 回）
 - (2) 承：メシアとしての権威を現わすも指導者層の拒否を受ける（第 10～33 回）
 - (3) 転：紀元 29 年春から弟子訓練、秋の仮庵の祭りの後、信者の家々を訪ねて旅
 - (4) 結：紀元 30 年 4 月、エルサレム入城・十字架・復活、復活から 40 日後に昇天
2. 転の部：紀元 29 年春から翌年 4 月 1 日まで
 - (1) 春から秋までの半年、異邦人地域へ 4 回の旅行（第 34～48 回）
 - (2) 紀元 29 年秋 10 月、仮庵の祭りの前（第 49 回）
 - (3) 仮庵の祭りにて（第 50～55 回）
 - (4) 仮庵の祭りの後（第 56～63 回）
 - (5) 冬 12 月、宮清めの祭りにて（第 63 回）
 - (6) 翌年 4 月 1 日までの約 3 か月の間にて


3. 紀元 29 年 12 月の宮清めの祭りのあと、紀元 30 年 4 月 1 日までの約 3 か月の間にて（第 64 回～）

この期間に関する記事は、全部で 15 になる。前回は、【①ユダヤ地方を離れてヨルダン川の東側、ペレヤ地方に退く（ヨハネ 10 : 40～42）神の国に入ることについて（ルカ 13 : 22～35）】であった。

今回は、【②招待客たちに断わられた大宴会のたとえ話（ルカ 14 : 1～24）】である。

□アウトライン

1. 食事会に仕組まれていたわな（ルカ 14 : 1～6）
2. 上座を選ぶ客たち（ルカ 14 : 7～11）
3. 食事会を設けたその家の主人に対して（ルカ 14 : 12～14）
4. 大宴会のたとえ話（ルカ 14 : 15～24）

大宴会のたとえ話

1. 食事会に仕組まれていたわな（ルカ 14：1～6）

1～2 節 ある安息日のこと、イエスは食事をするために、パリサイ派のある指導者の家に入られた。そのとき人々はじっとイエスを見つめていた。見よ、イエスの前には、水腫をわずらっている人がいた。

- 食事をするために、パリサイ派のある指導者の家に入られた・・・あとの 12 節でわかるが、パリサイ派のある指導者が食事会を設け、自分の家にイエスを招いた。「パリサイ派の指導者」とは、ラビの学校の校長。
- 人々・・・食事会に来ていたパリサイ派の人たちや律法学者たち
- イエスの前には、水腫をわずらっている人・・・この家の主人は、わざとイエスの前に病人を座らせていた。パリサイ派の規則では、安息日に病人を癒やすことは命に危険がない限り、してはならない。パリサイ派はそのような規則を「先祖からの言い伝え」と呼んで、旧約聖書に書かれたモーセの律法と同等の権威を主張していた。水腫（むくみ）をわずらっている人を安息日に癒やすのは、その日に処置しなければ命に危険が及ぶという状況ではないので、言い伝えを破ったことになる。イエスがどうするか、パリサイ派の人たちや律法学者たちが注目していた。この食事会はイエスを非難する口実を得るための食事会であった。

3～4 節 イエスは、律法の専門家たちやパリサイ人たちに対して、「安息日に癒やすのは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか」と言われた。彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて癒やし、帰された。

- 安息日に癒やすのは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか・・・人が定めた規則ではなく、神のことばであるモーセの律法に照らして、どうなのか。律法は、安息日に仕事をしてはならないと定めている。安息日は休息の日である。その休息の中には、病から癒されることも当然含まれるというのが、イエスの問いかけの意味である。
- 彼らは黙っていた・・・パリサイ人や律法学者たちは、イエスの質問には答えようとしなかった。彼らには、イエスを招いてイエスの教えに耳を傾けようというような思いは元からない。黙っていたのは、イエスに対する反感の意思表示であり、【さあ、どうする。先祖からの言い伝えを破って、目の前の病人を癒やしてみせるのか。そんなことをするのは、たとえ病人を癒やす奇跡をしたとしても、神からの力ではなく、悪魔からの力によるのだ】という思いであった。

- それで、イエスはその人を抱いて癒やし、帰された・・・パリサイ人たちがじっと見つめる中、イエスはその人を抱いて癒やし、その人を帰らせた。

5～6 節 それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が、あなたがたのうちにいるでしょうか。」彼らはこれに答えることができなかった。

- パリサイ人と律法学者たちは、イエスが水腫をわずらっている人を癒やして帰らせたのを見て、内心、【やはりイエスは言い伝えを破り、悪魔の力で奇跡をした】と思った。その瞬間、イエスからの質問である。あなたがたは自分の子どもや家畜が井戸に落ちたら、安息日でも引き上げてやるのではないか？ 答えは、引き上げる、である。家畜に対してですら安息日でもいいようにしてやるのに、まして人間に対して安息日でもいいことをしてあげるのは当然である。イエスの質問を受けて、彼らはイエスを非難することができなくなった。

2. 上座を選ぶ客たち（ルカ 14：7～11）

7～11 節 イエスは、客として招かれた人たちが上座を選んでいる様子に気がついて、彼らにたとえを話された。「結婚の披露宴に招かれたときには、上座に座ってはいけません。あなたより身分の高い人が招かれているかもしれません。あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』と言うことになります。そのときあなたは恥をかって、末席に着くことになります。招かれたなら、末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『友よ、もっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのとき、ともに座っている皆の前で、あなたは誉れを得ることになります。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

- だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる・・・このたとえ話が教えようとする中心テーマ。
- この原則により、たとえ話の教えを読み返すと、次のとおり。
 - 他人と自分を比べて少しでも自分が上になるように立ち回るのを、やめよ。宴会で自分が着くべき席を決めるのは、自分でもなければ、他の客でもない。その宴会に招いてくれた人である。神の国の宴会で言えば、神が決めるのである。
 - 神の前にへりくだるのが、真の謙遜である。真の謙遜とは、他人と比較して自分を高くしたり低くしたりすることではない。聖なる神

の前に立つなら、自分も他人も無に等しい。神の前にへりくだり、神が与えてくださるイエス・キリストの義を受け取る以外には、自分は義人となれない。そのことを認め、信じるなら、神は、信じた人をイエス・キリストにあって「完全な者」、「きよい者」、「神の子」として見てくださる。自分を低くする者が高くされるのである。

3. 食事会を設けたその家の主人に対して（ルカ 14：12～14）

12～14 節 イエスはまた、ご自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や晚餐をふるまうのなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどと呼んではいけません。彼らがあなたを招いて、お返しをすることがないようにするためです。食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」

- ご自分を招いてくれた人・・・イエスをわなにかけようとしたパリサイ派の指導者
- 昼食や晚餐をふるまう・・・隣人に対する愛の実践である。隣人を愛することは、モーセの律法の中でも重要な定めである。ふるまうとは、与えることであり、お返しを期待してすることではない。
- お返しをすることがないように・・・しかし、パリサイ派の人たちがするふるまいは、お互いにほめ合ったり、お返しをしたりできる人たちばかりの集まりであった。そのような集まりをしながら、自分たちは隣人愛を実践している義人である、と誇っていた。
- 義人の復活のとき・・・義人の復活のときは神の国（メシアの王国）が始まるときでもある。このことばを横で聞いていた他の客が、次の 15 節でイエスに語りかける。

4. 大宴会のたとえ話（ルカ 14：15～24）

15 節 イエスとともに食卓に着いていた客の一人はこれを聞いて、イエスに言った。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」

- なんと幸いなことでしょう・・・こう言った客の一人は、自分も当然その中にいることになると思っている。【自分はイスラエル人として生まれ、モーセの律法を持つ神の民の一員である。義人の復活にあずかり、神の国に入り、その建国を祝う宴会の席に座って食事をするはずだ】

16～17 節 するとイエスは彼にこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大勢の人を招いた。宴会の時刻になったのでしもべを遣わし、招いていた人たちに、『さあ、おいでください。もう用意ができましたから』と言った。

- ある人・・・父なる神
- 盛大な宴会・・・神の国（メシアの王国）
- 大勢の人を招いた・・・イスラエル民族の当時の世代
- しもべ・・・洗礼者ヨハネ「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」（マタイ 3：2）、そして続いてイエス「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」（マタイ 4：17）
- 招いていた人たち・・・とくに指導者層。まず指導者たちがメシアに従い、民衆を導く責任がある。
- 用意ができました・・・用意をしてきたのは、旧約の預言者たち

18～20 節 ところが、みな同じように断り始めた。最初の人是这样言った。『畑を買ったので、見に行かなければなりません。どうか、ご容赦ください。』

別の人はこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです。どうか、ご容赦ください。』

また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

- 招かれていた人たち、とくに金持ちの指導者たちは、イエスを拒否した。

21 節 しもべは帰って来て、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい。』

- 町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちを・・・指導者層が見下していた貧しい人たちや障害者たち。指導者層からは「罪人」と呼ばれ、イ

スラエル人としては扱ってもらえなかった取税人や遊女たちも含むであろう。

22～24 節 しもべは言った。『ご主人様、お命じになったとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』

すると主人はしもべに言った。『街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいになさい。

言うておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。』

- 街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を・・・垣根は町の城壁がないような田舎の集落、街道とは主要な町々を結ぶ大路を指す。町から離れた、いなかからも人を連れて来ることになるが、街道を通る人々の中には異邦人も多い。ルカ 13:29 では異邦人の救いが暗示されていた。よって、ここでも「街道や垣根のところ」にいる人たちは異邦人を指すと考えられる。イスラエル人だけでなく、異邦人も連れて来いということ。
- あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません・・・イスラエル民族の当時の世代で、イエスを拒否した人たちは、義人の復活にあずかることなく、神の国に入ることもできない。したがって、神の国の建国を祝う宴席にすわり、食事を味わうこともできない。